

## 令和 4 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属小学校	校長名	佐々木 昭弘
幼児・児童・生徒数（R5.3.1現在）	752	学級数	24
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人間としての自覚を深めていく子ども</li> <li>○文化を継承し創造し開発する子ども</li> <li>○国民としての自覚をもつ子ども</li> <li>○健康で活動力のある子ども</li> </ul>		
② 学校経営方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全校職員の協力のもとに、全人教育を目指す。</li> <li>○グローバル人材育成のための先進的教育を目指す。</li> <li>○インクルーシブ教育システムにおける教育モデルの開発・実践に取り組む。</li> <li>○本校の特色である小学校における「教科担任制」を充実させ、実験的・実証的に授業を展開し、「研究発表会」の開催、『教育研究』誌の刊行等を通して、これからの日本の小学校教育モデルをつくる。</li> <li>○スリム化したカリキュラム（40分授業等）の編成、教科横断的な機能を高めた総合活動（STEM<sup>+</sup>）を取り入れたカリキュラム編成の研究に取り組む。</li> <li>○現職教育の拠点校をめざすと共に、海外に向けても積極的に教育実践の発信及び教育技術交流を行い、小学校教師教育の国際的拠点校をめざす。</li> <li>○一人一台端末の有効的な活用方法を探りながら、児童のよりよい学習環境の整備に努める。</li> <li>○新型コロナウイルスの感染予防対策を適切に取りながら、児童の学びの場を保障するための具体的な手立てを講じる。</li> <li>○職員の業務内容を整理し、勤務状況の改善を図る。</li> </ul>		
③ 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 全人教育をめざす 小学校では、教科内容を発展的に学ぶ態度を育成するとともに、運動や体験的な活動を重視し、知・徳・体の統合的な教育を推進する。</li> <li>② グローバル人材育成のための先進的教育をめざす 「STEM<sup>+</sup>」のカリキュラム編成を推進し、国際理解教育、英語教育、情報教育等の観点から、グローバル人材育成のための方向性を探る。また、セキュリティを高めたネット環境・ICT環境をさらに整備し、積極的活用と研究を推進する。</li> <li>③ インクルーシブ教育システムにおける教育モデルの開発に取り組む 附属 11 校と連携を図りながら、インクルーシブ交流の教育モデルの開発に協力する。</li> <li>④ 未来 10・20 年を見通した将来構想の構築と共有化を図る 小・中・高、さらには特別支援学校との連携を深めると共に、本校の存在意義を明確にするために、将来構想委員会を立ち上げ、将来構想の共有化を図る。</li> <li>⑤ 新しいカリキュラム編成をめざす 小学校における「教科担任制」の教育的な機能を高めると共に、カリキュラムのスリム化（40分授業等）を図る。文部科学省の研究開発学校の指定を受け、これからの日本の小学校教育モデルをつくる。</li> <li>⑥ 教師教育の拠点をめざす 全国の小学校教育のモデルになるような試みを行う。「研究発表会」の開催、教育誌『教育研究』誌の発行、「各地研究会・研修会」への協力等を継続して行う。そのために、オンラインの活用にも力を入れる。 小学校教職課程の設置に伴い、教育実習の充実に努める。</li> <li>⑦ 国際教育協力の貢献をめざす 引き続き JICA や APEC への協力を積極的に行う。また、提携を結んでいたデンマークや韓国との授業研究を継続していく。算数、理科だけでなく、幅広い教科教育において、国際連携を深めていく。 今後ともオリパラ教育プログラムの開発を継続して取り組む。</li> <li>⑧ コロナ禍の中での学校生活の見直し 新型コロナの感染予防対策を講じながら、授業をはじめとする学校生活を充実させるためにすべきことを常に考え続ける。また、行事の意義や内容についての見直しを図る。</li> </ul>		

④ 前年度（令和3年度）の成果と課題

① 先導的教育拠点として〔重点目標 ①・②・⑤・⑧〕

令和元年度から『『美意識』を育てる』の研究に継続して取り組んでいる。教育における「美意識」を明らかにするとともに、それを育てるための授業のあり方についてその具体を探っているところである。令和5年6月までを一つの区切りとしているので、令和4年度から研究のまとめの時期に入る。

課題として浮き彫りになってきたのは、教科間の系統・連携指導の充実とバランスである。令和2年度から文部科学省の研究開発指定校として取り組んでいる「指導内容のスリム化、教科横断的な指導を含むSTEM<sup>+</sup>教育を取り入れた新しいカリキュラム創出」について、今後も「美意識」の研究と関連づけながら進めていく。

研究の成果は、年2回の研究会（6月・2月）や教育誌『教育研究』等で、これまで通り発信していく。

② 教師教育拠点として〔重点目標 ⑤・⑥・⑧〕

「美意識を育てる」をテーマにした研究発表会を、令和3年6月にオンラインにて開催できた。当初計画していた対面による2日間開催とはならなかったが、多くの参加者に本校の研究について発信することができた。（「研究紀要」No.77参照）例年2月に開催している「初等教育研修会」では、オンラインではあったが2日間の日程で開催できた。授業ビデオを公開しながら全教員が提案を行うとともに、午後は、各教科・領域ごとに今日的なテーマを設定し、全国各地の教員と意見交換が行われた。

また、月刊誌『教育研究』においても、各教科・総合活動等の新しい教材開発、指導法の開発をし、提起し続けている。

これから教師を志す学生に対しても、筑波大学初等教育コースの学生や看護学類生の教育実習を通して指導を行っている。令和元年度から「教育実習修了証」を発行し、卒業後3年間は、本校の研究会へ無料で参加できるようにしている。

地域協力の一環として、東京都内の教育委員会が主催する研修会や、校内研究会への講師派遣を協力しているが、令和3年度は新型コロナウイルスの感染拡大予防の観点から、その回数はかなり制限された。また、近隣校の教員の日常的授業参観受け入れや、日本国内からの研修の受け入れ等は実施できなかった。（筑波大学の教員免許状更新講習は、オンラインにて3日間（6教科）開催することができた。）令和4年度は、感染状況等を注視しながら適切に判断し、実施するための方法を模索していきたい。

③ 国際教育拠点として〔重点目標 ②・⑦〕

令和3年度は、海外への渡航も海外からの来日もできなかったため、国際的な交流を図ることができなかった。これまで交流を続けてきたデンマークなどからは、授業研究会を希望する声は今も届いている。国内外の感染状況に応じて意見交換する場の持ち方について考えていきたい。

④ その他〔重点目標 ③・④・⑧〕

特別支援教育との連携については、令和3年度もコロナ感染拡大の影響を受け、ほとんど行うことができなかった。12月の共生シンポジウムをきっかけとし、附属大塚特別支援学校との新しいつながりができたので、令和4年度に向けて新たな交流の方法を探っているところである。

令和4年1月以降、本校でも新型コロナウイルスに感染する児童や濃厚接触者に特定される児童が増えた。自宅待機になった児童に対しては、オンラインを併用したハイブリッド型の授業を行ってきた。児童に一台ずつ端末が配付され、今後ますますオンラインを授業に活用することが増えると予想される。セキュリティの強化等、ネット環境を整備していく必要がある。

附属小学校の今後のビジョンを明確にするために立ち上げた「将来構想委員会」を中心に、他附属との連携も含め、新たな附属小学校のあり方をこれからも考えていきたい。

### 3 重点目標達成についての総括的評価

令和4年度も、新型コロナウイルスの感染防止対策をしながら、通常通りの教育活動に近づけるための努力を続けた。時間割は通常通り行い、授業時数を確保することができた。また、コロナの症状が軽い子や、登校に不安がある子に対しては、オンライン授業を行ったり、「まなびポケット」で授業内容を共有したりしながら、子どもたちの学びを進めることができた。校内のWi-Fi環境も整い、児童に配付された端末の有効活用も進めている。

行事に関しては、内容や日程を変更したものもあるが、通常通りの活動にだいぶ近づいてきた。宿泊行事は、減泊したり時期を変更しながらも、全ての学年が実施できた。運動会は、6年生のメインの競技を復活させたり、保護者の応援を再開したりすることができた。また、集会活動は、11月から講堂に全校児童が入れるようになり、児童主体の活動ができた。

一方で、学校外の人と直接会って交流を深める場の設定が難しかったため、インクルーシブ交流や海外での研修を行うことができなかった。お互いの見方や感じ方を交流させながら、それぞれのよさを取り入れていく場を、オンラインなども活用しながら増やしていけるよう工夫する必要があるようである。

教科教育の研究では、校内研究のテーマ「『美意識』を育てる」と関連させながら、各教科・領域の指導内容や指導方法について見直しを図ってきた。この過程の中で見えてきた各教科の本質を柱に、カリキュラムのスリム化を模索しているところである。

また、「STEM<sup>+</sup>」の考えを取り入れた総合活動では、学級独自の新たな取り組みが見られる。各学級の活動を互いに紹介する場を設け、教員間で共有を図ることにより、活動の幅を広げることができた。

これらの研究への取り組みや成果については、「研究発表会」や「教育研究」誌を通して、全国に発信している。また、新型コロナウイルスの感染者数が徐々に減るに従って、講師派遣依頼や本校の視察も増えつつある。そのような場においても、研究の成果について実践事例を交えながら提案し、そこでいただいた意見もその後の研究に生かしている。

附属小中高の未来を見通した将来構想については、それぞれの学校の情報交換を進めたり、研究者の話を伺ったりしながら、少しずつではあるが前進している。

### 4 令和5年度の学校課題

授業や諸行事を、できるだけ通常に近い形に戻していく必要があるが、そのままコロナ禍前に戻すのではなく、このコロナ禍の経験を生かして見直しを図り、活動内容を整理するとともに、新たな活動を生み出していく必要がある。

また、本校の使命を再確認し、先導的教育拠点校としての役割を十分に果たせるように、他の附属との連携を深めながら、将来の教育のあり方を見据えた研究を継続していかなければならない。そこで得た知見を、日本のみならず諸外国に向けても発信していけるように、その方法も含めて、構築していくことが求められる。

本校の教育研究のシステムは、それぞれの教科の独自性の共生・共創によって保たれてきたと言える。しかし、独自性が高いがゆえに、教科横断的な指導カリキュラムの構築が難しい現状になっていたことは否めない。現在、総合活動では、「STEM<sup>+</sup>」の発想を取り入れた活動を多く取り入れ、教科横断的な指導法の研究に取り組んでいる。このような新しい視点を取り入れることが、新しい総合的なカリキュラム編成へとつながるはずである。このことを実践研究を通して明らかにしていかなければならない。

インクルーシブの視点からの活動や海外との交流も再開する必要がある。また、多様な価値観に対応できるように、職員の研修も取り入れながら、本校の制度等の見直しを図る必要がある。

## 5 学校課題に向けての具体的な取り組み

各行事について、その目的を見直すとともに、新たな可能性を探っていく。また、日々行われる授業については、各教科の意義を見直し、その質をさらに高めていくことは、当然のこととして継続していく。そこで得た知見を、校内研究にも生かしていく。

また、総合活動については、「STEM<sup>+</sup>」「子ども理解」「ICT 機器の活用」という視点から新たな取り組みを始める。

国際交流に関しては、デンマーク、イギリスでの授業研究会を継続して行う。また、児童の日米交流会も再開したい。オンラインを使った交流の可能性も含めて、今後も継続していきたいと考えている。

附属大塚特別支援学校との交流も再開し、インクルーシブ教育の可能性についても探っていく計画がある。

働き方改革、著作権等の扱い、ジェンダー問題などについて研修を深めるとともに、実現可能な変革については、積極的に取り組んでいきたい。

## 6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- 『研究紀要』第78集（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
  - 『教育研究』令和4年5月号～令和5年4月号（編集：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
  - 2022年度『初等教育研修会』要項（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
  - 『小学校理科学習内容の指導ポイント』（著：佐々木昭弘）明治図書
  - 『最高の主体性を発揮する子どもと教師』（著：佐々木昭弘）東洋館出版社
  - 『カテイカ 暮らしの知恵でイーカンじ』（監修：横山みどり）NHK出版
  - 『小学校家庭科+αで楽しくなる手縫い&ミシン縫い指導のコツ』（著：横山みどり）東洋館出版社
  - 『算数授業を左右する教師の判断力』（編著：森本隆史）東洋館出版社
- 等

# 学 校 評 価 （ 自 己 評 価 ） 報 告 書 （ 項 目 別 表 ）

令和 4 年度

学校名

筑波大学附属小学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-1	説明、板書、発問など、各教員の授業の実施方法	<p>新型コロナウイルスの感染拡大の影響はあったが、講堂を使って月1回ペースの授業研究会を継続して行った。授業後の研究協議会では、専門教科の垣根を越えて、授業技術について厳しい指摘をし合う。その中で、教師の指示・説明・発問、板書力といった教育技術についてより高いものを求め続けている。</p> <p>また、月刊誌『教育研究』でも板書や発問などを特集題として取り上げ、外部の研究者に論じていただくと共に、本校からの発信を続けている。</p>
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	<p>児童の問題意識を高めるために、独自の教材開発を行ったり、導入部分での問題提示の仕方を工夫したりしている。また、学習形態の工夫、ICT機器の有効な活用により、協働的な学びの実現を図ることができた。</p> <p>コロナ禍であっても、感染防止対策を取りながら、実際に体験したり、お互いの意見を交流させ、合意形成を図ったりする場を積極的に取り入れるようにした。</p> <p>本校では教科担任制をとっているが、それぞれの専門分野を超えた議論が校内研究会などの研修を通して、児童の興味・関心を高めた自主的・自発的な学習を実現することができた。</p>
1-2-2	児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況	<p>コロナ禍であっても、ほぼ通常通りの時程で学校生活を行うことができた。そのため、授業時数の確保は十分にできた。様々な理由で欠席している児童に対しては、オンライン授業で可能な限り参加してもらったり、「まなびポケット」で課題や板書の共有をしたりしながら、学力差が広がらないように配慮した。</p> <p>学力については、通常の年度と変わらないと感じている。</p> <p>体力面では、運動会の種目や林間合宿での登山において、ほぼ通常通りの内容で行うことができた。6年生の海での遠泳でも、隊列を組んで、コロナ禍前と同じ程度の時間を泳ぎ切ることができた。これらのことから、体力面においても、通常の年度と変わらない力をつけていると言える。</p>

3-1-2	問題行動への対処の状況	<p>各学級で生じた児童の問題行動については、早期発見に心がけ、当該学級の学年部員やその学級の専科教員、管理職と、小さな変化であっても情報共有をしながら指導に当たるように心がけている。場合によっては、朝のミーティングを開いたり、定期的な会議を開いたりしている。専門家（SC等）と情報を共有し、保護者と連絡を密に取り合いながら解決に向けて取り組んでいる。</p> <p>特に、1年生と4年生の保護者は、全員がSCと面談をする機会を設けている。また、6年生の児童はアンガーマネジメントについての指導をSCから受けた。</p> <p>各学級、各学年の状況については、職員会議後に設定された児童指導会議において報告し、学校全体で情報を共有するとともに、組織的に問題を解決できるように取り組んだ。</p> <p>状況によっては、附属学校教育局の協力を仰ぎながら指導に当たってきた。</p>
3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	<p>コロナ禍のために、多くの行事が通常通りに実施できなくなった。その中で、子どもたちが自主的な取り組みを見せた。例えば、集会行事では、より多くの児童が関われるように、実行委員の仕事内容や準備物等に工夫をこらした。また、運動会では新しい種目の練習に自主的に取り組んだり、横断幕を自分たちで製作したりする姿が見られた。</p> <p>学校生活を自らの手でよりよくするために、昼の放送などにいくつかの学級が参加したり、校内の危険箇所を知らせるポスターづくりをしたり、新たな工夫が見られた。また、ペットボトルキャップを集めたり、ウクライナの人たちのために防寒着を集めたりする活動に自主的に取り組む姿も見られた。</p>
4-1-3	法定の学校保健計画の作成・実施の状況、学校環境衛生の管理状況	<p>保健主事の養護教諭と保健担当の主幹教諭が中心となり、毎月行われる保健部会において計画の遂行状況を確認し、児童への指導、担当各教諭への連絡を随時行った。</p> <p>新型コロナウイルスへの対応では、学校医の指導を受けながら感染防止計画を立案し、全職員の協力のもと感染防止の準備を進め、実行することができた。</p>
6-1-1	特別支援学校と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>コロナの感染拡大の影響により、長年継続している附属大塚特別支援学校との農園での交流活動は実施できなかったが、来年度の実施に向けて、連絡を取り合っている段階である。</p>
11-1-1	学校運営へのPTA（保護者）、地域住民の参画及び協力の状況	<p>若桐会、後援会における学校への支援活動は、他校に類を見ない強力な体制である。</p> <p>若桐祭は、入れ替えによる二部制で行われた前年度から通常通りに近づけ、全員参加の一部制で行うことができた。保護者の皆様の熱い思いとご努力のお陰である。</p> <p>このような積極的なサポートによって、児童の学校生活は大変充実したものになっている。今年度は、駅周辺などの清掃活動も行うことができた。</p> <p>また学校評議委員会では、地域の方、本校のOB、大学など有識人などに関わっていただき、多様な視点からのアドバイスをいただくことができた。</p>
14-1-2	大学との連携・協力	<p>本校の校内研究においては、大学の先生方からのご助言も参考にさせていただきながら進めている。</p> <p>集団での活動に入っていけない児童やその保護者への対応について、実際の様子を観察していただいたり、カウンセリングをしていただきながら、専門的な立場から助言をいただいている。</p> <p>初等教育コースの授業や教育実習については、通常通り、対面で実施することができた。</p>

14-1-3	先導的教育研究	<p>毎月1回の校内研究会では、研究授業や講演会を行った。研究テーマ「『美意識』を育てる」にもとづき、その具体的な指導方法について研究授業を繰り返しながら、研究の成果や課題を明らかにすることができた。</p> <p>そこで得た知見を研究紀要にまとめ、6月の研究発表会で発表した。さらに、月刊誌『教育研究』等で広く教育現場に提案することができた。</p> <p>さらに、文部科学省の指定も受け、カリキュラム研究にも取り組んでいる。</p> <p>総合活動では、「STEM<sup>+</sup>」の視点を取り入れた活動についても実践を積み重ねている。また、新型コロナの影響でオンラインを使った学習などが行われたことや、児童に一台ずつ端末が配られたことを機に、ICT機器を活用した新たな学習方法についても、実践的な研究を進めているところである。</p>
14-1-4	教員養成・教師教育	<p>「研究発表会」を6月にオンラインで開催し、2月には「初等教育研修会」を対面+オンラインのハイブリッド形式で開催することができた。全国から多くの先生方が参加され、様々なご意見や感想をいただくことができた。今後の研究に生かしていきたい。</p> <p>新型コロナの感染者数が減少するに伴い、各都道府県教育委員会や研究団体、研究校等からの講師派遣依頼や視察要請が増えてきた。オンラインによる研究会は徐々に少なくなり、対面で講演を行ったり、実際の授業を見たりしながら、現場の先生方と授業について話し合うことができるようになってきた。</p> <p>教員養成については、筑波大学の初等教育学コースの授業において、本校の教員が学生の指導に当たっている。また、教育実習の受け入れも行っている。</p>
14-1-5	国際交流・国際貢献	<p>3年ぶりにデンマーク（リンビートー市）において、「北欧授業研究会」（算数・理科）を実施することができた。そこからさらに足を伸ばし、イギリス（ケンブリッジ大学附属小学校）でも授業研究会（算数）を新たに開催することができた。両研究会とも、今後とも続けていく予定である。</p> <p>筑波大学留学生との交流会は、対面で実施することができた。学習した言語を使いながら直接交流することを通して、諸外国への関心を深めたり、外国語を学ぶ意欲を高めたりすることができた。</p> <p>アゼルバイジャン共和国との学校間交流については、オンラインで計画を進めているところである。</p> <p>4年生の希望者を対象とした「日米児童交流会」は、新型コロナの影響により、実施できなかった。</p>